

◎配本概要

第1回配本	第1巻	第1号～第9号	1947年10月～49年8月	2016年11月刊行 本体54,000円＋税 ISBN 978-4-908976-00-1
	第2巻	第10号～第15号	1949年9月～50年3月	
	第3巻	第16号～第21号	1950年4月～50年9月	
第2回配本	第4巻	第22号～第27号	1950年10月～51年3月	2017年5月刊行 本体72,000円＋税 ISBN 978-4-908976-04-9
	第5巻	第28号～第34号	1951年4月～51年10月	
	第6巻	第35号～第41号	1951年11月～52年6月	
	第7巻	第42号～第47号	1952年7月～53年3月	
★別冊(解題・総目次・索引)				

●解題—紅野謙介(日本大学文理学部)
●体裁—中尾務(富士正晴記念館)
●推薦—鳥羽耕史(早稲田大学文学学術院)
●山田稔(作家)
●挿価格—本体126,000円＋税
●原誌提供—富士正晴記念館

■主要執筆者一覧

足立利雄 久坂葉子 福田紀一
尼崎安四 小島輝正 富士正夫
井口浩 齊田昭吉 堀内進
井沢義雄 島尾敏雄 前田純敬
伊東幹治 島京子 松川秀郎
鶴崎博 庄野潤三 三沢玲爾
宇野史郎 高椋勉夫 南木淑郎
小川正巳 武部利男 矢ヶ崎恒子
桂田重利 千々和久弥 吉田紗美子
岸本通夫 林富士馬
北尾一水 広瀬正年



関連図書(既刊書)

山河【復刻版】

●巻数—全3巻・別巻1・別冊1
●別巻—「戦後大阪詩運動資料」
●別冊—解説・回想・総目次・索引
●解説—宇野田尚哉／季村敏夫／丁章
●黒川伊織／細見和之
●山田兼士
●回想—長谷川龍生／倉橋健一
●体裁—A5判・上製・総約1,500頁
●挿価格—本体74,000円＋税
●推薦—金時鐘／長谷川龍生

われらの詩【復刻版】

われらの詩の会刊「1949年～1953年」
●巻数—全2巻・別巻1・付録1
●解説—宇野田尚哉／川口隆行
●海老根勲
●体裁—A5判・上製・総約1,260頁
●挿価格—70,000円＋税
●推薦—御庄博実／小沢節子



付録 峠三吉自筆稿本「原爆詩集」表紙

海賊たちの破天荒な航海日誌

戦前の同人誌「三人」の残党と、詩人伊東静雄に師事する作家が集い、文学雑誌「VIKING」は創刊された。強烈な個性の乗組員たちは、関西を拠点として、戦後の荒々しい時代の海を自在に駆け巡ったのである。世界的長寿を誇る本誌の、創刊号から久坂葉子追悼号にあたる第四七号までを復刻！

1947年～1953年

VIKING

- 書名—初期「VIKING」復刻版
- 初代船長—富士正晴
- 解題—紅野謙介／中尾務
- 体裁—A5判・上製・総約2,800頁
- 巻数—全7巻＋別冊1
- 推薦—鳥羽耕史／山田稔
- 刊行開始—2016年11月

三人社

限定70部

三人社

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369

※図書館様・書店様へ
小社は少数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

戦後精神の記録として

山田 稔 (作家)

同人誌「VIKING」には「VIKINGの約束」というのが掲げられていて、それはつぎのように始まっている。

「文学雑誌VIKINGは、自らの存続を唯一の目的として発行される。丁度、人がよく生き、永く生きることとを求めよう」と。

「文学雑誌」とはいえ、他の同類のものとはことなり、文壇を意識して切磋琢磨、文学賞を狙うなどといったことは考えていなかった。創立同人の中心であった富士正晴は当初、同人例会を、掲載作品をさかんに談論風発、冗談のとびかう知的サロン風のものにしたいと考えていた。しかし実際にそこに集まったのはサロン風紳士淑女どころか、やはり海賊船の乗組員にふさわしい、強烈な個性の持ち主たちであった。井口浩、小島輝正、島尾敏雄、岸本通夫、小川正巳そして「クイン・エリザベス」久坂葉子……。彼らはきびしく論じ合い、はめをはずしてふざけ、その言動はときに粗暴に逸脱した。それは可能性、創造性にみちた戦後間もないこの時代の荒々しいエネルギーの湧溢でもあったのだ。その意味で、この復刻版はたんなる文学同人誌の枠をこえた、戦後精神の貴重な記録としての価値をもつ。

戦後文学の西の拠点

鳥羽耕史 (早稲田大学文学学術院教授)

芥川賞候補に三回、直木賞候補に一回ノミネートされながら、ついに受賞することのなかった文学者・富士正晴の最高傑作は、同人誌「VIKING」であろう。戦時下に天才少年・三島由紀夫のデビュー作『花ざかりの森』の出版を手がけながら冷淡に遇した富士は、一九三三年に野間宏・桑原静雄(のちの筑摩書房社長・竹之内静雄)とはじめた同人誌「三人」に

單獨旅行者

島尾敏雄

第一章

市内のにぎやかな場所も歩き疲れた。さうかと言つて電車に乗るのにはまらなく嫌悪感を覚えた。それはその場に停留所を離れなければならない。その運送の気分が耐えられない気がしたのだ。あれか、これか——
それは僕がさういふ持病を持つてみたからか分らなかつた。総ての予定が計画とか約束とかに何か胸がつかつかして来て、頭も重く睡も狂おしくして視力がさへかすんで視界がぼやぼや見え、いはば気が遠くなつて来たのだ。さういふ小時間を経て来たのだ。あの時、肉体的な欠陥から、甚を飲み過ぎたとか、二三の飲食店で得たものの食べ過ぎとか、いふようなことがさうなつて、そんな状態が起き出して来るのに違ひない。すると、そんな風な僕も、道に迷つた状態の僕も、二直線にのみまふらずに往來を歩いてゐることが、もうやましく又いづく憂鬱したくなつた。
と同時に何處か寂寥な所に膝を下したいといふ気がすつと絡をひいて来て、頭の中に飯前の飯粒のやうな活字がばいばいつまつて、言葉も、音も、句ひも之以上何一つとして、まごころ余地がない手放しに我儘なうた状態だ。たゞ、柔らかなソファにすづつて、身体をうづめた、ただの糸ひで、疲れたら何處にでも坐り込めばよいにそれはしないで、僕は

▲創刊号 本文より

内容見本

第27号 例会記事

人物 同人14名・維持会員5名

1	カクノキ	嶋崎 (例会)
2	オクノキ	小島 (ルボ)
3	ク・O・V	菅原
4	Dr. サラワ	佐野
5	ナマス	小川
6	トマス	伊藤
7	Q・E	岸本
8	リ・ホ	井口
9	マ・サ	三沢
10	Mr. 塚村	ハイジ会員
11	Mr. フロ	吉田
12	Mr. ミ	井口
13	Mr. 阿古	
14	Mr. 阿古	
15	Mr. 阿古	
16	Mr. 阿古	
17	Dr. ド	富士
18	コルマン	加藤
19	イノセント	岸本

▲第27号 例会記事

▲第27号 例会記事

編輯記

「VIKING」が、いかに船出するとならざるに、石炭のなかり船員が述べてゐるなりと、誠に不知見、誠に小人数の同人は、既に、香田昭吉、菅正夫、井口浩、富士正晴、神戶に、島尾敏雄、三島由紀夫、伊東幹治、桑原静雄、竹之内静雄、佐野由紀夫、八のものが、出版人員である。空航者も居るが、知れぬが、未だ判りない。

「VIKING」は、いかに恒のかさばる、空航者を、強さ、どちらの方角へ出掛けるか、僕等の、台詞等は何か、それは、しばらくは、僕等にも判つてゐる。だが、僕等は、唯、航路、したり、出ても、酔狂も少しは、持ち合せてゐるが、それだけ、まじらう、月に一度は、航海日誌をお目にかける、精神、航海日誌を、壁にはり、目元、面、や、にて、あ、ま、ら、い。

では、さようなら!

▲創刊号 編集後記

VIKING 47
VILLON 4
共同
久坂葉子追悼号

小説 幾度目かの最期
追悼文

富前	小南	坂小	福足	宮今	藤久
士田	川本	本西	里立	川井	井坂
正純	正淑	眞頼	元利	き和	葉
晴敬	巳郎	三子	子雄	子子	子子

1953年3月

▲第47号 目次

▲第47号 目次



「VIKING」第10号例会 1949年9月25日 大阪大学病院内食堂
前列左から富士正夫、島尾敏雄、坂本眞三、松川秀郎
中列左から吉村忠夫、久坂葉子、岸本通夫、菅原稷、広瀬正年、三沢玲爾、江草弘道、庄野潤三
後列左から小川正巳、松本光明、伊東幹治、富士正晴
※写真提供 富士正晴記念館

は情熱を傾け、内務省の同人雑誌統合の指示に抗して廃刊されるまで一年も続けた。そして島尾敏雄の『幼年記』に触発されて一九四七年にはじめた「VIKING」には交代可能なキャプテン制を敷き、自らの寿命も超えて、おそらく世界最長寿の同人誌へと育てあげた。

もちろん重要なのはその長さだけではない。創刊号掲載の島尾敏雄「單獨旅行者」は、真善美社のアプレゲール叢書として、野間宏「暗い絵」ともに富士の装丁によって刊行され、大きな反響を呼んだ。島尾だけでなく、庄野潤三、前田純敏、小島輝正、久坂葉子ら、若い才能が集まった誌面は生き生きとして、三五号までは粗末なガリ版刷ながら、戦後文学の西の拠点としての役割を果たしていた。富士自身も、「童貞」をはじめとする軍隊経験を描いた小説など、のちの直木賞候補作「帝国軍隊における学習・序」につながる作品を書いている。そしてまた、今回の復刻の最終号である四七号は久坂葉子追悼号として、富士による久坂顕彰の長く持続する仕事の起点となっているのである。この復刻版は、東京に偏った戦後文学史の見直しにもつながる重要なものとなるだろう。